

Title	福地桜痴と福沢諭吉：『懐往事談』と『福翁自伝』をめぐって
Sub Title	Fukuchi Ochi and Fukuzawa Yukichi, a comparative study of Kaio-jidan and Fukuo-jiden
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1990
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.82, No.4 (1990. 1) ,p.669(1)- 693(25)
JaLC DOI	10.14991/001.19900101-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19900101-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19900101-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 福地桜痴と福沢諭吉 ——『懐往事談』と『福翁自伝』をめぐって——

飯 田 鼎

- (一) 『懐往事談』と『福翁自伝』
- (二) 幕末の政治経済情勢——通貨問題を中心に
- (三) 福地桜痴と幕末政治家
- (四) 文久遣欧使節団における福地と福沢
- (五) 明治における福地・福沢

(→)

幕末から明治にかけて、西欧文明の影響をうけ、近代日本の夜明けともいうべき時代に際会して啓蒙家、文明批評家あるいは教育者などとして活躍したいわゆる知識人は必ずしも少なくないが、そのなかできわだって異彩を放つ二人の人物がいる。ひとは云うまでもなく福沢諭吉であり、いまひとは福地桜痴に指を屈するであろう。明治初年、卓越せる言論人として、「福地・福沢」と並び称せられ、両者ともに高い評価をうけていたそのひとり、福地桜痴の名を、今日、知る人が意外に少ないのは、一体何故であろうか。われわれが、幕末から明治に活躍したこの巨人の実像を、それぞれの自伝的著作を読み比べ、検討することを通じて明らかにし、その秘密に肉薄することは、激動の時代に生きた知識人の類型を模索し、混迷の現代に生きる者として、何らかの指針を探りあてることができるのではないかと思う。

福地と福沢、この対照的な生き方をした二人の人物には、その鮮やかな性格や行動の差異にもかかわらず、境遇や身分上の点で、実に共通し、きわめて類似する点が目立つ。

福沢は、中津藩士ではあるが、安政五（1858）年、藩命により江戸、筑地鉄砲洲の奥平藩中屋敷に蘭学塾を開いた後、間もなく英学に転換し、中津藩出身者を中心とする洋学志望の青年たちを教育、傍ら幕府にも「反訳方」として出仕し、万延元年、木村撰津守の従僕の資格で、咸臨丸で渡米の機会を得たのち、それが機縁で文久二（1862）年いわゆる文久遣欧使節の一員に加えられ、また暫く経って慶応三（1867）年、再度の渡米の機会を得ることとなった。福沢の場合、中津藩士でありながら、幕臣としての身分を与えられていたことがこの幸運を齎したものである。

福沢のように幕臣とはいいながら、中津藩籍を保有しているという場合とは異なり、長崎奉行の推挙によりいわば生粋の幕臣として仕官する機会をえ、安政六（1859）年、外国奉行支配通弁御用

御雇に任ぜられた福地は、その稀にみる俊敏の才、博学多識でしかも語学に堪能であったこともあり、早くから幕府要路の人々に接触する機会に恵まれた。その意味で、自叙伝、『懐往事談』は、彼自身が福沢諭吉と同時代人で、しかも、文久遣欧使節団の一員として行動を共にしたこともあり、幕府が衰亡の淵に臨んでいた時代、きわめて興味深い秘話や記述をもって鏤められている。『福翁自伝』の面白さ、その伝記文学における古典的価値については今更喋々たるを要しないであろう。倒壊に向って急激なテンポでその諸矛盾を露呈しつつあった幕府権力の末期、これを支え、昔日の威勢を盛り返そうとして苦闘する幕府中枢の政治家たちにたいして、一種クールな眼を注いでいるのとは対照的に、幕閣や要路の人々に信任され、福沢よりははるかに権力者に近く、いわば「熱い眼」をもって往時を追懐している福地は、彼らを描くことにおいては、その筆致は他の追隨を許さないが、他方、きわめて冷静な眼をもって観察する福沢のみた幕府断末魔の諸相もまた興味深いものがある。

『福翁自伝』は、明治32年、『時事新報』に発表され、その後、単行本となったもので、幼少の時から説きおこし、明治30年代まで、ほぼ全生涯の出来事を物語り風に記述している。ところが、福地の自伝的著作は、著者五四歳のときの作で、その対象とした期間は、十九歳から二八歳までのわずか十年間である。彼は何故に、福沢のように生涯の伝記をもって自己表明を行わず、わずかに十年、しかも幕末期に限定したのであるか。明治二七年、徳富蘇峰の奨めに従い、本書を公刊するに際し、つぎのような序文を寄せているのは、その理由を物語っているといえよう。

桜痴居士やうやく老いたり。齡<sup>よわい</sup>すでに半百を踰えて心力その半を銷磨し、既往を回憶するごとに恍として夢のごとく、ほとんど歴史上の想をなせり。憶ふに居士少年にして<sup>みだ</sup>妄りに青雲の望を懐き、笈を負ひて東遊し、十九にして褐を幕府に積み、大に庸<sup>もち</sup>ひられんことを冀<sup>こいねが</sup>ひて志を得ず、東西に奔走せる十年。空しく悲惨劇場の人たりき。既に廟堂の諸公に知られて、砌りに<sup>えんぱん</sup>鴈班に列したるも、才短く志迂にしてその用たるに適せず、退きて筆を新聞紙に執ること十有余年の久しきに至れり。しかれども一事のなすところなくして終に論壇を下りて、わずかに身を以て文苑の中に免かる。しかしてその跡を顧れば、居士三十余年間の境界<sup>しつがい</sup>は悉皆過失の実験にして、これを言ふはすなわち懺悔たるのみ。<sup>(1)</sup>

この序文には、やや謙遜にすぎるとはいえ、稀代の秀才の評価をうけながら、幕末の政治家としてその命運を担うことはできなかったが、さりとて明治の文壇および新聞界に華々しい文名を唱われながら、「悉皆過失の実験」として、過去三十年を回想する彼の態度のなかに、充たそうとして充すことができなかった欲求、鬱積する不満を垣間見ることができよう。

これを福沢諭吉が、『福翁自伝』の最後に、過去六十年の生涯を回顧し、感慨深く述べているところと比較すれば、その対照はまことに鮮やかである。

回顧すれば六十何年、人生既往を想えば恍として夢の如しとは毎度聞くところであるが、私の夢は至極変化の多い賑やかな夢でした。旧小藩の小士族、窮屈な小さい箱の中に詰め込まれ

注(1) 福地源一郎『懐往事談』行人社、昭和六〇年、1頁。

て、藩政の楊枝<sup>ようじ</sup>をもって重箱の隅をほじくるその楊枝の先にかゝった少年が、ヒョイと外に飛び出して故郷を見捨てるのみか、生来教育された漢学流の教えをも打遣<sup>うちぢ</sup>って西洋学の門に入り、以前に変わった書を読み、以前に変わった人に交わり、自由自在に運動して、二度も三度も外国に往来すれば考えは段々広がって、旧藩はさておき日本が狭く見えるようになって来たのは、何と賑やかなことで大きな変化ではあるまいか。……。

福地桜痴<sup>おうぢ</sup>（源一郎）は、天保十二（1841）年、長崎に生まれた。祖父、嘉昌<sup>こうあん</sup>、父苟庵、代々医師を業としていたというから、家庭のなかに文人としての彼を育てる知的雰囲気は充分に存在したと考えられる。またその出生の地が長崎であったという事実は、彼の将来にとって決定的な意味をもつ。早熟の秀才ともいべき福地は、士農工商などの身分に関係なく出入を許された聖堂において、安積良斎<sup>あさかこうさい</sup>に師事し、やがて英語を森山多吉郎に学んだ。彼が福沢諭吉を識ったのは、当時外国掛として幕府の外交関係を担当していた通詞<sup>つうじ</sup>森山多吉郎の推挙によって御雇通詞となった頃であったと思われるが、まず、横浜開港直後、英語を学びはじめた時期の両者の体験から考察することにしよう。

## (二)

福地は、『懐往事談』第二の冒頭に、つぎのように書いている。

余が横浜行として江戸を発したるは六月四日の朝なりき。これよりさき、余は郷里なる長崎を出で江戸に來り、諸方に寄宿したる末に、この春より小石川金剛寺坂上なる森山先生の塾に寄宿したり（先生は通称多吉郎とて長崎和蘭通詞の出身）、数年前より徴されて江戸に來り、常に江戸下田の間を往復してもっぱら条約のことに関わり、當時は外国奉行支配調役並格にて外交の通弁を任じ、幕府外交のことについてはもっとも勤勞を尽くしたる人なりき。そのことはなほ追々に述ぶべし。この時に際し江戸にて英語を解し英語を読みたる人は、この森山先生と中浜万次郎氏との兩人のみなりければ、余はこの先生について学びたるなり。すでに福沢諭吉氏も先生の宅に來りて益を請ひたることなどありて、津田仙弥、須藤時一郎、富永市造、沼間慎一郎<sup>(3)</sup>の諸氏も先生の門に出入りせられたりき。

この文章だけから判断すると、福沢も福地とともに森山について英語教育をうけたように感じられるが、周知のように、福沢は、森山が多忙なため、教えてもらえなかったことは『自伝』に物語られている。安政六（1859）年、福沢は開港間もない横浜に行き、オランダ語を実地に試したところ、国際語としては通用しないことに失望し、オランダ語を断念し、英学に転換、ようやく森山に会って英語教授を懇願してみた。

長崎の通詞の森山多吉郎と云ふ人が、江戸に來て幕府の通詞を勤めて居る。其人が英語を知

注（2）『福翁自伝』、岩波文庫、315頁。

（3）前掲、『懐往事談』、17頁。

て居ると云ふ噂を聞出したから、ソコで森山の家に行き習ひませうと斯う思ふて、其森山と云ふ人は小石川の水道町に住居して居たから、早速其家に行き英語教授の事を頼入ると、森山の云ふに、昨今御用が多くて大変に忙しい、けれども折角習はうと云ふならば教へて進ぜやう、就ては毎日出勤前、朝早く来いと云ふことになって、其時私は鉄砲洲に住って居て、鉄砲洲から小石川まで頼て二里余もありましよう、毎朝早く起きて行く。所が今日はまだ出勤前だから又明朝来て呉れ、明るる朝早く行くと、人が来て居て行かないと云ふ。如何しても教へて呉れる暇がない。

森山が英学塾を経営しており、福地がここで彼の薫陶をうけたことは明らかであるが、福沢は、何故、教えてもらえなかったのであろうか。私は、森山が多忙というよりも、福沢という未知の、しかし野望に燃えるかにみえる青年に、ある種の疑惑をもち、卒直に弟子として受け容れることに躊躇を感じたのではないか、と思う。福沢は、つぎのようにつづける。

ソレは森山の不親切という訳ではない。条約を結ぼうと云ふ時だから、なかなか忙しくて実際に教える暇がありはしない。さうすると、こんなに毎朝来て何も教へることが出来んでは気の毒だ、晩に来て呉れぬかと云ふ。ソレぢや晩に参りませうと云て、今度は日暮から出掛けて行く。……所が此夜稽古も矢張り同じ事で、今晚は客がある、イヤ急に外国方(外務省)から呼びに来たから出て行かねばならぬと云ふやうな訳で頼と仕方がない。凡そ其処に二月か三月通ふたけれども、どうしても暇がない。逆もこんな事では何も覚えることも出来ない。加ふるに森山と云ふ先生も何も英語を大層知て居る人ではない。漸く少し発音を心得て居ると云ふ位。逆も是れは仕方がないと、余儀なく断念。……

この一節には、森山の福沢にたいする消極的な拒絶の態度を読みとることができないであらうか。幕臣とはいえ、福沢は本来、他所者である。これに比べれば、福地は、すでに横浜の運上所(税関)通弁および翻訳方として森山の信任をえていた。福沢論吉26歳、福地源一郎は19歳であったが、森山の推挙により、十人扶持の通詞として御家人に加えられ、翌年には、外国奉行支配同心格に昇格し、外国奉行水野忠徳の知遇をえ、年齢が若いとはいえ、幕臣としての待遇の点では、福沢よりはるかに格が上であった。福沢にたいする森山の眼が異常に冷やかかであったとしても、それは仕方がなかった。

たゞ福沢は、森山の英語について、「漸く少し発音を心得ていると云ふ位」と回想しているが、これは必ずしも妥当な見方とはいえないように筆者は思う。だが、福沢にとって幸運なことは、英語学習への熾烈な慾求が動機となり、アメリカ渡航への熱望もだし難く、友人で将軍侍医の蘭学者

注(4) Sir Rutherford Alcock, *The Capital of the Tycoon, a Narrative of a Three Years' Residence in Japan*, 2 Vols. New York, 1863., R. オルコック『大君の都』岩波文庫版, 山口光朔訳, 全三巻, および Ernest Satow, *A Diplomat in Japan*, London, 1921. フェーネスト・サトウ『一外交官のみた明治維新』, 坂田精一訳, 岩波文庫版, 上下二冊, などの叙述をみると, 森山は, きわめて有能な通訳であったことが窺われ, 福沢の評価は精確でないように思う。例えば, オルコック, 上掲, (上), 176頁。

桂川家の当主甫周の好意により、木村摂津守に伴われて渡米の機会をえたことであるが、英語学習において、一步先んじていた福地は、本来は、遣米使節の随行員として、或いは少なくとも福沢と同じ威臨丸で渡航する機会に恵まれる筈であったにもかかわらず、その上司水野忠徳<sup>ただのり</sup>の失脚によって、アメリカ大陸への夢を絶たれたのであった。

青年福沢と福地をとりまく幕末の環境は、1859年という時点をとって考えると、つぎのような日本の直面する諸問題によって特徴づけられていたといえよう。以下、やや詳細に、幕末の政治経済状況について考察する。まず第一に、いわゆる「安政の条約」によって規定された二市二港の開市開港の延期の問題、第二に、これと関連して、条約に規定された神奈川から横浜への開港場の移転問題、そして第三に通貨問題があげられる。福地は下級武士ではあったが、外国奉行の支配下であったため、これらの対外政治の渦中であって、その容易ならぬ状況を肌で体験することになったが、福沢は、この事態をいわば傍観者として外側から客観視する立場におかれていた点で、まことに対照的であった。

まず通貨の国際的な価値比較の困難であるが、この時期、いかに幕府が混迷した状況にあったか、これについて福沢は、つぎのように記している。

あるとき私が鍛冶橋外の金物屋に行って、臺火斗<sup>たいじょう</sup>を買って、価が十二匁というそのとき、どういうわけだか供の者に銭を持たせて居て、十二匁なれば凡そ一貫二三百文になるから、其銭を店の者に渡したときに、私が不<sup>ふ</sup>心付いた。此銭の目方は凡そ七八百目から一貫目もある、然るに銭の代りに請取た臺火斗は二三百目しかない。銭も火斗も同じ銅でありながら、通用の貨幣は安くて売買の品は高い、是れこそ経済法の大間違ひだ、こんな事が永く続けば、銭を鋳潰して臺火斗を作るが利益だ、何としても日本の銭の価は騰貴するに違ひないと説を定めて、一步を進めて金貨と銀貨との目方性合を比較して見て、西洋の金一銀十五の割合にすれば、日本の貨幣法は間違ひも間違ひか大間違ひで、私が主唱して云ふにも及ばず、外国の商人は開国その時から大判小判の輸出で利を占めて居るとの風聞。ソレカラ私も知て居る金持の人に頻りに勧めて金貨を買はせた事があるが、是れも人に話をする許<sup>ばか</sup>りで自分には何にも為やうとも思付かぬ。唯私の覚えて居るのは安政六年の冬、米国行の前、或人に金銀の話をして、翌年夏帰国して見れば、其人が大に利益を得た様子で、御礼に進上すると云て、一朱銀の数も計へず私の片手に山盛り一杯、金<sup>かね</sup>を呉れたから、深く礼を云ふにも及ばず、何<sup>さて</sup>は扱置き早速朋友を連れて築地の料理茶屋<sup>(5)</sup>に行て、思ふさま酒を飲ませたことがある。

この叙述のなかで、福沢が、「西洋の金一銀十五の割合にすれば、日本の貨幣法は間違ひも大間違ひ」とのべているのは、幕末における金銀比価が、日本では金一にたいし銀三の割合で、銀がいちじるしく高価であるのが特徴的で、その背景としては、銀の産出量にたいして、銀細工などを中心に、その需要が強かったことが考えられる。この問題について、当時、駐日英国公使として活躍していたオルコック (Sir Rutherford Alcock) は、つぎのように書いている。

注(5) 『福翁自伝』、岩波文庫版、215頁。

外国人が、かなり大規模に金貨の輸出を行っていた。そこで政府は、それを強奪的な不法行為と見なして憤慨したばかりか、国をまったくの貧困の状態におとし入れるという結果にいたく驚いた。実際に、これはかつての悪夢の再現であった。すなわち、外国との交際がはじまった最初の世紀〔16世紀〕に、ポルトガルやスペイン人は、国内の金塊や貨幣を手のおよぶかぎりもち出して当時の支配者に不安を抱かしめ、また憤慨させたものだ。たしかにこのことは、大閣様やその後継者たちが、皆殺しと完全な鎖国策を遂行するにいたった断固たる憎悪の主な原因のひとつであった。われわれは、まさしくこれと同じ理由で、同じ危険にさらされているようであった。<sup>(6)</sup>

この一節は、重大なことを示唆している。福沢も、わが国幕末の経済的危機を、すでに彼が若かった安政年間に意識していたことが察せられるが、オルコックもまさに同じことを感じていたことになろう。

ただオルコックは国益を代表する駐日公使として、日本の通貨体制の不備と列国の「安政の条約」を抛り所とする日本からの金の自由な輸出が、どのようなおそるべき結果をもたらすかを深刻に憂慮していた。武力的な圧力と経済的優位を武器として締結された安政の条約に基づき、この島国の一小帝国から金輸出を通じてその富を奪うことが、冒険的な貿易商人の立場からみて容易であるとしても、これによって本来この国に根強い外国人にたいする反感を一層強め、この国民の不満をかきたて、生活難を助長することが、結局は尊王攘夷の運動をおし拡め、広汎な民衆をまき込むナショナリズムの運動に転化発展することを、オルコックは、もっとも恐れていた。

わたくしが閣老たちを、真の解決策はかれらの手中にあり、かれらの金と銀の相対価値をヨーロッパ市場において通用している比率にして、不均衡を是正すればよいというふうにと説得するには長いことかかった。世界中の他のすべての地域では、金と銀との比率は一对十五ぐらいであった。ところが日本では一对三の比率であった——すなわち一分銀四枚（目方でいえば、ドル貨〔メキシコ銀貨〕一枚と三分の一）で小判一枚を買うことができた。この小判は、中国その他の地で、十八シリング四ペンス四分の一、すなわち同額の銀の三倍以上の値うちがあった。銀で金を買えば、たった一回の操作でその資本金が三倍ないし四倍になり、一年間に五回も六回もできるという方法をまえにして、商人たちにこんな商売をしてこの国に不安の念や敵意をいだかしめることは危険だとか不得策だとかいって見たところで、とうていだめだ。それは、あたかも風に話しかけるがごとく、むなしいであろう。人間の本性には、誘惑にさからうことができる限界というものがあると思う。<sup>(7)</sup>

重量で計ると、一ドルは、一分銀貨三枚に等しいというのは、国際的に認められた情報で、外国人がイチブ＝「一分」(Itzebou としばしば現わした)と呼んだのは、天保一分銀といわれた方形の銀

---

注(6) 通貨問題をめぐる幕末の経済状態については、R.オルコック、前掲『大君の都』、上、六章および十四章を参照。

(7) オルコック、前掲書、406頁。

貨のことであるが、さきにオルコックが指摘したように、金銀比価の点で、幕末日本では銀が異常に高く評価され、金貨すなわち小判の流出が甚だしく、これに対抗するために、幕府は、後に安政二朱銀といわれた新しい銀貨を発行し、当時四進法をとっていた日本の通貨制度では、一分＝四朱、一両＝四分という等式が成立していた。一ドル＝三イチブの交換が常識と観念してきた外国人にとって、安政二朱銀の出現は脅威であった。一ドルを重量交換で評価すると一ドル＝二朱貨幣二枚、価値としては一分の交換となり、本来、国際的な通念としては一ドル＝三イチブなのに、安政二朱銀を媒介にすると、一ドルは実に一分との交換になってしまう。福地の庇護者水野筑後守忠徳を中心とする外国掛はよく策をつくしたとは思いますが、このような術策は、オルコックをはじめ外国外交使節の見破るところとなり、厳重な抗議に遭い、結局、もとの〔一ドル＝三イチブ〕に復帰せざるをえなかった。

さきに引用した福沢の回想に物語られた感想からも察せられるように、幕府の通貨制度は混乱をきわめていたが、福地桜痴は、水野の直属の輩下としてまさにその事態を目撃し、幕府の行末に限りない不安を覚えていた。

幕府の御勘定奉行外国奉行が一生懸命の知恵を絞り出して製造したる新南錠銀は外国公使の議論に破られてたちまち水の泡とあいなりたれば、条約面に従ひて、同種の同量を以て引替えざるべからず、……。

全体、従前かの円銀を一分の価格に定めたるはあまり下直に過ぎたるに相違なけれども、にはかにこれを三分に上ぐるもまたあまり高直なる心地せられたるは当時一般の人情なり。よって誰が相場を定めたと云ふことはなけれども、さて物の相場は妙なところより自然に立つものと見えて、横浜市内にて円銀は二分ならば請取るべしと云ふことにあいなりて、外国人と相対の取引にはおよそ二分の通用たること日本商人中の申合せのごとくなりたりけり。<sup>(8)</sup>

しかしこのような日本側の政策に外国政府が満足するはずもなく、一ドル＝三分を主張して幕府の条約違反を責め、これにたいして幕府は、一計を案じ、危機をのりこえようとした経緯を、福地はつぎのように記している。

さてかくなりて見る時には、外国人より見れば、現在運上所にて引替ふれば、三分に代る円銀が市中にて二分内外の通用は我等にとりて大損なり、何等のことありとも三分の価格に通用せしめざるべからずと論じて、これを公使領事に迫ったりければ、公使も、しきりにそのことを幕府に懸合ひ、度々の談判に涉つたる末において、しからば幕府は外国公使の要求に応じ円銀の面に三分通用という極印を打つべしと定まり、七月初めより銀座役人は横浜に出張して外国人の願ひ次第に、その円銀の面上に三分銀と極印を打ち、奉行所はまた極印の通り三分の価に通用すべしと触達したり。かく幕府が極印を打ちたる以上は三分の通用は決して差支へあるまじと幕吏も信じ外国人も信じたりけるに、前に述べたるごとく自然に立ちたる相場は、政府の威光といへどもこれを動かして高低せしむることあたはざりき。日本商人は皆申合せたるが

---

注(8) 福地桜痴、前掲書、26～27頁。

ごとくに、この極印円銀はこれを受取ることを否みて拒絶したり。<sup>(9)</sup>

この一節は、幕府がその通貨政策においてきわめて重大な提案を行ったことを意味している。當時一般に広く流通していた天保一分銀という通貨は、金貨（小判）の代用貨幣で、云いかえれば、今日の紙幣のようなものであった。小判は一般には流通していなかった。これにたいして本来の銀貨である丁銀・豆板銀というのは、形は前者が海鼠型、豆板銀は文字通り豆状で、豆板銀は丁銀の補助貨幣で、品位は一定であったが、重さは一定ではなかった。その結果、支払いのときや金貨および銅貨と交換と両替するときは、いちいち秤にかけて重量を確かめるといふ不便さを伴っていた。つまり、単位も小判のように枚数ではなく、重さによって計られ、匁（もんめ）（3.75グラム）、その千倍の重さの貫（くわん）（4匁、3.75キログラム）を単位として使用していた。丁銀・豆板銀はもっぱら関西で流通していたが、とにかく幕末日本の通貨体系は、複雑で且つ混乱していたので、外国人にとっては理解するのが容易ではなかった。

ただ、国際貿易の常識として、金銀比価が日本でのように一對三ではなく、一對十五であることを知っていた長崎の役人は、幕府に提言し、その政策として、この三分銀をいわば小判にたいする補助貨幣として、実質三分の内容はもたない円銀に三分という極印を打ち通用させようとしたものである。この発想は、今日の通貨制度に不可欠な補助貨幣の意義を担うもので、興味深い。福地の指摘するように、この新円銀は数日にして廃止されたが、そのため、安政の条約第五条の規定は遵守されることとなり、その事実、条約によって、百ドルが実際上三十一分強と交換されることとなった。まことに、アーネスト・サトウが述懐しているように、「そこで俸給百ドルの官吏は、公定の換算より十三分を差引いた二百九十八分を受取った。そして、市場相場を下回った額を、彼らは再びドルと交換した。こうして百ドルの金は百三十九ドル二十五となり、四〇パーセント近い利輸を実際にかせぐことができたのである」。<sup>(10)</sup>

以上、福地桜痴と福沢諭吉との関係を明らかにするために、彼らをとりにまく幕末の情勢を、幕府にとってもっとも緊急な通貨問題を中心に、やや詳しく論じたが、この時点では、この二人は、幕府通詞森山多吉郎を媒介に、接触する機会が訪れるかにもえたが、実現していない。この明治啓蒙思想史に偉大な足跡を印する二人は、さらにつぎにのべる遣米使節派遣にあたっても、まことに奇妙なめぐり合わせを経験するのである。

### ㊦

福沢は、森山多吉郎の許を訪れながら、その門下生として俊才を謳われた福地源一郎に面接する機会をえなかつたのであろうか。さきに指摘したように、福地は、「福沢諭吉氏も先生〔森山多吉郎……引用者〕の宅に來りて益を請ひたることなどありて……」とのべているところをみれば、朝

注（9） 前掲書。28頁。

（10） アーネスト・サトウ、前掲書、（上）、25頁。

に晩に森山を訪ねた福沢を垣間見たことは考えられるし、福沢の方でも福地を意識したであろうことは充分考えられる。しかし、福沢は、その『自伝』のなかで、福地については一切ふれていない。だが、幕府が1860年、はじめてアメリカ合衆国に派遣したいわゆる遣米使節の一員として、福地は当然加えられるべき立場にあり、本人もまたこれを強く希望したにもかかわらず、その機会をえず、これに反して、福沢は、使節一行の一員としてアメリカ軍艦ポーハタン号での渡米ではなかったけれども、幕府海軍の軍艦威臨丸での使節護衛に任ずる司令木村摂津守の従僕の資格で、アメリカへ渡航し、はじめての西欧体験の夢を果すことができた。ここにもまた福地と福沢をめぐる奇妙な因縁のようなものが感じられる。『懷往事談』によれば、

余は森山先生の塾に入るの前において、書生の頃より水野氏の愛顧をうけ、数月間その門下に寄寓して館生たりしこともありければ、もっとも同氏には親密にして、氏が七月上旬より神奈川奉行兼帯にて在勤の時も朝夕祇候しての嘆息を聞き、岩瀬、川路、永井等々の諸雄とともに協議して幕府のために謀りたるも、神奈川に移転してはことごとく画餅となるべし、もし移転することあらば、外交にはさらに困難を招き、貿易も従って繁栄ならざるは必定なり、余輩初めは偶然にして横浜を選定したるが、横浜は実(11)に貿易上の最形勝地なるを、外国公使等が覚らざるは遺憾千万なり、と云はれたるを聞きたりき。

この叙述に明らかなように、福地が私淑し、彼自身その部下でもあった水野筑後守は、岩瀬<sup>ただなり</sup>忠震、川路<sup>としあきら</sup>聖謨、永井玄蕃等とならんで、幕末外交界に重きを成した秀才のひとりであった。

水野は、嘉永五(1852)年、浦賀奉行となり、翌六年、長崎奉行のとき、ロシア使節プチャーチンを応接し、交渉に臨んだ。安政五(1858)年、最初の外国奉行に任じられ、やがて神奈川奉行を兼任、但しロシア国海軍士官斬殺の責任を問われ、これを辞して軍艦奉行に任ぜられるという経歴の持主であった。福地がその側近にあって幕府中枢の政治的情報に接したのは、安政五年頃のこと、まさに福沢はこの頃、藩命により、築地鉄砲洲の奥平藩中屋敷において蘭学塾を開設しつつあった時期であった。

何事も独力で自己の途を切り拓かねばならなかった福沢とは対照的に、福地には、はじめは森山多吉郎、のちには有力な庇護者としての水野筑後守が影を投じていることは、幕末の政治家群像を描き出した彼の著作に鮮やかである。有力なパトロンを得たことの幸運は、つぎの一節を読めば明らかであるが、同時にそのことが、決定的に彼の運命を左右する誘因ともなった。

余が此政治家を見知りたるは、此人が嘉永六年、長崎奉行にて、魯国全権と会見したる時に在り、其頃は余はいまだ幼年にて、何の弁別も無かりしが、余が父は医師にて水野の知遇を得て、時々国事など論談したる事ありけるに、「水野は当時魯国使節と談判の為に西下せる筒井、川路の諸人に対して、常に強硬説を持したり」と云へり(是は慈父の直話)。

其後、余は東上して水野の食客と成り、<sup>ついで</sup>尋で訳官となりて水野の配下に列し、始終此人に左右したるを以て、水野を知るや最詳なり。水野は外交に関しては、鎖国の不可なるを覚りて、

注(11) 福地、前掲、『懷往事談』、31頁。

開国議を採り、内法に関しては、幕政の弛廃を憂ひて、改革議を唱へたれども、其性質は、急速を嫌ひて漸進を喜び、秩序を重んじて輕拳を忌める人なれば、寧ろ保守の氣象に富めるが如くなりき。されば、外交内法に関し、岩瀬、永井等と往々意見の衝突せる所ありしと雖も、閣議已に定まりたれば、意を<sup>ま</sup>枉げて是に従ひ、幕府の全權となりて英仏諸国条約に調印したりと云へり。是に由て外国条約の諸項に就て、水野は其後とても、常に慨嘆せられたる事ありけり。若それ其智略才幹より言へば、水野は遙に岩瀬、小栗の下に在りと雖も、其強硬剛直は優に其上に位して、以て陰然その觀望を<sup>つな</sup>繋ぎたる政治家なりとす。<sup>(12)</sup>

秘痴の水野筑後守にたいする敬愛の情を漂わせる文章ではあるが、水野の幕府要路の人々のなかでの地位は微妙なものがあつた。福沢が蘭学塾を開いた安政五年、幕府は新たに外国奉行の制度を設け、水野筑後守、岩瀬肥後守、永井玄蕃頭の俊秀を抜んで外交官僚としたが、いわゆる將軍継嗣問題をめぐって大老井伊直弼と意見を異にした結果、岩瀬<sup>ただなり</sup>忠震と永井は排斥され、「安政六年の末にはさしも外国奉行の要地もおほむね<sup>がんこ</sup>執袴子弟か俗吏庸才の集り所」となり、わずかに堀と水野だけが残つて外交の中心人物となつた。もしこのことだけならば、福地もまた外国奉行たる水野の随員として、遣米使節の一員に加えられ、サンフランシスコの地において福沢と相見える機会に恵まれたであらう。しかし日米和親条約の批准書交換にあたって、その直前に水野が外国奉行の任を解かれたことは、福地の希望を打ち砕くこととなつた。

米国条約を議定せるに當り、本条約（批准）は、実施後一年の中に米国華盛頓<sup>おしんとうん</sup>において交換すべしと定めたるは深意のありしことにして、当時、岩瀬、水野はこの批准交換を期として自から公使となり、幕府の中にて有為の人才を率ゐて米国に赴き、親しく外国の状況を視察し、大にわが国開明の歩を進むるの機会を得んと望み、米国公使ハルリスもまた大にその意を賛成したるにつきかくは議定したることにして、堀田閣老もまた実に同意せられたりと云へり〔森山氏の説によれば、堀田閣老はすこぶるこの議を是なりとし、あるひはおのれ自から水戸の老公を説き一橋<sup>がやうぶ</sup>刑部卿をも勧め、あいともに米国一覽に赴くべし、と云はれたることありしと、岩瀬が物語せしと云へり〕。<sup>(13)</sup>

この一節には、きわめて興味深い事実が示唆されている。すなわち岩瀬、水野のほか、外交交渉における老中堀田<sup>まさよし</sup>正陸、徳川斉昭およびその息、一橋慶喜の動静で、森山多吉郎が、岩瀬の意見として語つたことを、福地が書き留めており、真憑性において必ずしも充分と云えないとはいえ徳川斉昭および堀田備中守のような支配階級の對外認識の一端を窺わせるものがある。

幕藩体制の維持と外国交渉の帰結が、密接に関連するという事態が白日の下に曝されたとき、政局の焦点に位置する幕末の政治家たちが、どのような態度をとつたかは、きわめて興味ある問題であらう。福地はその『幕末政治家』のなかで、嘉永六（1853）年、アメリカ合衆国の提督ペリーの開国要求にたいし、身を挺して當つた備後、福山の城主、安部伊勢守正弘の功績を高く評価し、と

注（12） 福地源一郎『幕末政治家』、平凡社、東洋文庫、265～266頁。

（13） 福地、『懷往事談』、43頁。

りわけ水戸斉昭と将軍家慶との間を調停したことに彼の政治的手腕を見出している。<sup>(14)</sup> 幕臣としての忠節を完うしようとした福地は、安部伊勢守死去後の幕府権力の失墜を、支配階級内部の対立と暗闘の結果と考え、幕府衰亡の原因を、政治家としての彼らの自覚と使命観の欠如に帰しているが、<sup>(15)</sup> この点では幕府の衰運をひとつの歴史的必然として扱った福沢とは対照的である。

当時、幕政に参画した政治家は、ひろく親藩、譜代大名を含む幕臣とそのほか一部の外様大名を視野にいれるとき、徳川家の命運と外交交渉にかかわる政治的立場との関係の点で、絶対的攘夷派、条件付開国派および開国派の三つのグループに便宜上分類することができよう。福地の上司であった水野筑後守忠徳や岩瀬肥後守忠震の如きは開国派に属する人々であり、徳川斉昭は実に絶対的攘夷派の巨頭ともいふべき存在であった。老中堀田正睦は、条件付開国派、越前侯松平慶永や薩摩侯島津斉彬もまたこの派に近かったが、複雑なのは、大老井伊直弼の立場であった。彼は絶対的攘夷の立場をとる点では斉彬と共通する面をもちながら、幕権の維持および拡大という政略的観点から、開国政策に踏みきった人というべきであろう。すなわち、絶対的攘夷派と条件的開国派の中間に位置するということができ、本質的には絶対的攘夷派に数えられるべきであるが、政略上、開国をやむなくうけいれるという立場に立っていた。だが問題はつぎの点にある。すなわち、わが国の歴史はじまって以来の遣米使節派遣が、堀田正睦のような、条件付きとはいえ、諸外国との平和的交渉を通じて、開国への途を準備した閣老ではなく、対外強硬派井伊直弼によって企てられ、福沢もこれによって貴重なアメリカ見聞の機会を得たということであろう。

この間の経緯を辿るならば、嘉永六（1853）年、アメリカの日本開国のための特命全権公使水師提督ペリーを応接し、多端な幕末外交の処理に苦闘したのは、備後福山の城主阿部伊勢守正弘であった。彼は、天保十四（1844）年、年齒わずかに二五歳で老中に任じられ、安政四（1857）年、三九歳で夭折したが、前後二十年間にわたり、幕閣の首座を占め、嘉永安政年間、外国勢力の政治的、軍事的圧力に抗して、日本の独立のために奮闘した。その死の直前、安政三（1856）年、堀田備中守（正睦）を老中首座に推薦、はじめて外国御用取扱いを命じられ、いわば外務大臣ともいふべき職務が制度化された。伊勢守が死去し、堀田政権が誕生した直後に、日米和親条約の締結と勅許問題に加えて、将軍家定の将軍職後継者の問題、すなわち「一橋慶喜か紀伊宰相家茂か」をめぐる議論が伯仲した。老中堀田正睦は、御家門として重きをなし、家臣橋本左内の意見を取り入れた松平春嶽（慶永）等の支持により、一橋慶喜擁立の立場を明らかにし、幕臣では福地の上司である水野筑後守忠徳（田安家家老）、岩瀬肥後守忠震（御目付）、永井玄蕃頭（同上）、<sup>げんぼのかみ</sup>幕府外では西郷吉之助（薩摩）、橋本左内（越前）などの積極的支持を獲得した。<sup>(16)</sup> 老中堀田正睦は、しかしこの二つの重大な問題の処理に失敗した。すなわち安政二年七月以来、下田に渡来し、滞在していた米国公使ハリスは、米国全権公使たる資格において、江戸に出府、将軍に拝謁して国書を提出し、条約締結を行う

注（14） 福地、『幕末政治家』、平凡社、東洋文庫、13頁、「阿部伊勢守」の項を参照。

（15） 福地、『幕府衰亡論』、平凡社、東洋文庫、を参照。

（16） 福地、『幕末政治家』、58～59頁。

ことを強く要求したのである。

これをめぐって老中堀田正睦の幕僚の意見は二分され、福地の上司水野筑後守は、この時期対外強硬派で、「官吏出府（この場合は、米国全権公使ハリスを指す……引用者）、登場拝謁、閣老談判、貿易条約、の四大要件は尽く承諾す可からず」と主張し、その強硬論が禍して外国掛り御勘定奉行の要職から田安家家老という閑職に追いやられた。この時点では、その部下であった福地の身分には直接の関係はなかったが、その後、安政六（1859）年七月下旬、ムラヴィヨフ艦長の率いるロシア艦隊に乗組んでいた士官二名が、横浜港に上陸、遊歩中、数人の武士によって殺害されるという事件がおこった。

すでに安政四年、ハリスが大統領国書捧呈のため、江戸出府途上、水戸藩士がこれを殺害しようと企てたが、事前に発覚、事なきを得たが、この事件は、最初の外国人殺害事件として幕閣に衝撃をあたえた。福地は、つぎのように書いている。

各国の領事はこの変を聞いてたゞちに運上所に駈けつけて奉行に面会を求めたるに、奉行は戸部の役所に在りて逮捕の令を下すに従事して、いまだ現場に出張せざるを以て面会に及ばざりき。この時の奉行はすなわち水野筑後守にて、外国奉行兼神奈川奉行として出張したるなり。当夜この変報に接したれども水野は原来持重の人なりければ、一、二の外国人殺害せられたりとして奉行たるものがあはてて現場に出張すべきにあらず、役々申しつけて取計らはしむべきなりとて、翌朝例刻に至りて運上所へ出張したりき<sup>(17)</sup>。

水野は、ロシア側との談判の結果、「奉行が当夜現場に駈けつけて自から逮捕を令ぜざりしは怠慢なるが故に、日本政府は奉行を罰すべし」という要求に従い、田安家家老から再び御勘定奉行兼外国奉行に任ぜられていたが、再度その職を失うに至った。

福地のみた水野筑後守の人間像については、つぎの一節がよく物語っている。

水野が事を議し政を論ずるや、己れが信ずる所は固く執りて動かず、敢て交譲するを肯ぜざりければ、外人にも悦ばれず、幕閣にも容れられずして、常に不遇の地位に立てり。水野は常に嘆息して曰く、「今日外交の困難なるは、当初、岩瀬、永井等が、内国の事情を察知せずして、米国条約草案に於て、多くハリスの要求を容れたるが故なり。凡そ外交の事たる、漫りに外国の要求を承諾す可からず。それと同時に、承諾したる以上は、必ず之を實行して、彼を甘心せしめざる可からず。余は此事を前知して頻りに論じたれども、用ひられざりしが、果して今の<sup>(18)</sup> 状勢に至り、日本の国威を損じたるは残念なり。

水野は、たしかに才気煥発で、信念は強固であったとしても、やや軽率な言動がその政治生命に禍いしたと考えられる。その能吏という点では多くの儕輩に抜んでいてもかかわらず、日本の国家的独立という観点からみると、幕府という枠を出るものではなく、その点で岩瀬忠震とは、共通する面を多分にもちながら、相剋する側面も国家観などで顕著であった。勘定奉行としての財

注（17） 福地、『懐往事談』、39頁。

（18） 福地、『幕末政治家』、267～268頁。

政的視点から、外交問題を考えるに急な水野は、「内国の事情を察知せずして、米条約草案に於て多くハリスの要求を容れた」として、岩瀬等にたいする批判は鋭い。

だが、幕藩体制の矛盾を肌で実感し、それをどのような形で克服し、国家権力の将来のデザインにまで想いめぐらした点では、水野は遠く岩瀬に及ぶものではなかった。しかし人間的な資質や才幹の問題とならんで、この点では、両者の対立は幕府の権力構造の問題にも深くかかわっていたことも留意されなければならない。水野は、開国派とはいえ消極的な姿勢を崩さず、岩瀬らの積極的な開国派と対立したが、その根底には、川路聖謨としあきらとならんで、外交問題の処理に当る海防掛のうちでも勘定奉行系であり、これに反して岩瀬は目付系を代表して、両者はしばしば外交問題において反目し、また対立した。外交機関としての海防掛には、幕府の最高行政当局者が兼務の形で任にすることが慣例で、事実上、幕府権力の執行機関であった。<sup>(19)</sup>

はじめに指摘したように、水野は勘定奉行として通貨問題で辛酸をなめ、対外関係においては勢い消極的になり易い反面、目付系は、新しい問題しゅつたいが出来た場合、これに柔軟に対処し、機敏に行動することを要求される。当然、積極的ないしは開放的な態度になることは理解できよう。すなわち現状維持派と改革派との対立である。しかし夷狄排撃派徳川齊昭のような国粹主義派というのではなく、その意味ではいわゆる純粋な保守派ではなかった。阿部正弘は、はじめて海防掛（これが後に外国奉行として制度化されるが）を設置するとともに、堀田正睦を外国事務専任の老中とし、外国貿易を含む外交関係に当らせたが、水野がハリスの江戸出府にたいして消極的であったのに反し、岩瀬は、安部正弘の命によりハリスと下田で会談し、ハリスの内意を正弘に報告しているが、その報告にもとづき、堀田が外交掛老中に任命されているところをみても、阿部の岩瀬にたいする信任の厚さをうかがうことができるであろう。幕末外交事務に携った経験をもとにすぐれた記録を残した田辺太一もとかずは、その『幕末外交談』のなかで、岩瀬をつぎのように評価していることに注目しよう。

実に、その議論は公明正大であり、きょうきやう 恠おじけ 怯おそれる（おじけ、おそれる）疑忌の念が全く見られない。

そして、先にペリーが来たときには、この一味〔大目付、目付〕は打ち払いを主張し、また測量船の請いに対し、因循姑息の策を立て、プチャーチンが来たときには江戸に呼び寄せることに反対したのであるが、これまでの目付の議論にくらべて、その所見が判然と異なること、あたかも婦人と丈夫との差があるのは、ただただ岩瀬修理〔忠震〕その人あってのことであった。<sup>(20)</sup>

岩瀬は、当時、永井玄蕃頭、堀織部正おりのべとならんで、幕臣三傑と称せられたが、岩瀬はとくに鋭く且つ柔軟で、とくにハリスとの折衝以後は、積極的な外交派として幕府内の外交政策を主導し重きをなした。

積極の開国を主張する目付と消極の開国の立場に立つ勘定奉行の、相対立する上申をうけて、老中堀田正睦は、岩瀬の上申を採用した。しかし岩瀬の思想をもっともよく代弁しているものは、安政四年、前年のアロー号事件に驚愕した老中が、大小目付に上申書の提出を求めたとき、これら大

注(19) 松岡英夫『岩瀬忠震——日本を開国させた外交家』、中公新書、昭和56年、を参照。

(20) 田辺太一『幕末外交談』、坂田精一訳・校注平凡社、東洋文庫、1962年、44頁。

小目付の意見を代表して彼がまとめたと思われる上申書末尾に、つぎのような十項目に及ぶ実行目標を掲げていることである。

- (一) 西洋事情探索の者を派遣。
- (二) 国内諸港の法程を立て、それぞれの租税を定む。
- (三) 外国との貿易を開き、諸侯に令し、国産を運搬せしめ、天下と利を公共にする。
- (四) 在住官吏に限り出府を許し、その情偽を察し、聞見を広める。
- (五) 和親の国へこちらから官吏を置き、留学生を派遣。
- (六) 広く万国に航して真利を興す。
- (七) 世界の内、信義強大の国に交を厚うし、孤弱の国を救う。
- (八) いよいよ文武を練り、教化を厚うする。
- (九) 蝦夷懇開に、いま一層の力を用いる。
- (十) 天帝に代わり、忠孝信義の風をもって貪婪虎狼<sup>どんらん</sup>の俗を化し、五世界中一帝となすようにする。<sup>(21)</sup>

これは当時としてはまことに気宇壮大、ヨーロッパ文明を大胆率直にとりいれ、わが国を世界に冠たる大文明国たらしめようとして、若々しい情熱の旺盛しているのを感じるであろう。福地桜痴の敬慕した水野忠徳より、はるかに進んだ世界認識と外交的感覚の持主であった岩瀬は、堀田正睦の日米修好通商条約勅許における失敗、さらに一橋慶喜を將軍継嗣として支持する運動のなかで、紀伊徳川家茂をたてようとする井伊大老の不興を買い、永井玄蕃頭とともに罷免された。そのため、念願の夢であった遣米使節としての役割を演ずることができず、またその志をつごうとした水野もすでにのべたように、その機会を奪われたのであった。

福沢諭吉は、以上にのべたような遣米使節派遣の背景については、まったく与り知らぬところであり、従って、『福翁自伝』には、このことは全くふれられていない。福地桜痴は、この渦中において、政府要路の人々の動静に精通してはいたが、水野に近く、岩瀬にたいする評価は低い。もし、福地が岩瀬に親しみ、その精神的影響をうけていたとすれば、その後の彼の思想形成にある種の変化がおこりえたであろう。結論的につぎのような仮設がたてられよう。岩瀬のように、たんに積極的開国派というばかりでなく、幕府を中心としてであれ、「近代国家日本」を構想する外交家を中心に、水野や永井が加わるという遣米使節が、もし試みられ、一橋慶喜が將軍職を襲ったとすれば、幕末の情勢は、やや異なったものとなったのではなかろうか、ということである。

筆者はさきに大老井伊直弼を、絶対的攘夷派と条件付開国派の中間に位置する政治家としたが、彼には「幕府を超える」国家的観点が欠如していた。「幕府を超える」という意味では、水戸斉昭の方が、国民国家的観点からより進んでいたと考えられるし、一度、外国を認識すれば、積極的開国派に傾く可能性を、潜在的に秘めていたといえよう。井伊大老の下で構想された遣米使節、それは小栗豊後守忠順<sup>ただまさ</sup>を除いて、正使にして外国奉行新見豊前守正興<sup>しんみ</sup>、副使村垣淡路守範正<sup>のりまさ</sup>は、凡庸な

注(21) 前掲、松岡英夫『岩瀬忠震』、62～63頁。

人材といわれ、このわが国はじまって以来の壮挙も、たんに儀礼的な行事にとどまり、その後の幕府の衰運をおしとどめる何等の力ともなりえなかった。

福地も福沢も、まだこの段階では、日本国の前途に想いを致し、国民啓蒙を実行するほどの立場にはなかったし、何よりも当然、知るべくして、しかも相互に相識らぬ間柄であった。彼らが相識り、強烈なライヴァル意識に駆られたとすれば、つぎの文久二（1862）年、遣欧使節一行の一員としてであったろう。

#### (四)

幕末における外国への使節派遣は、海外への門戸を開放しようとする幕府権力者の積極的な意図に出るものではなく、外国の政治的・軍事的圧力によってやむなく企てられた消極的な、出来うれば鎖国政策へのひそやかな転換の意図を秘めて行われたものであり、半ば海外事情探索的、情報蒐集的な使命を帯びて、幕臣たちは渡欧したのである。開国を積極的に行うことによって、わが国の近代国家への途を模索しようとした岩瀬や水野が井伊直弼によってこの壮挙に参加することを断念させられたのは、既述のように將軍継嗣問題にまつわる確執の結果、外国奉行の職を辞退させられたことによるが、その根底には、幕府為政者の間に日本国将来の構想について基本的にはげしく対立するところがあったからにほかならない。

さて、文久二（1862）年、老中安藤対馬守の下で計画されたいわゆる文久遣欧使節は、その派遣理由として、安政の条約によって規定され、すでに期限の迫っている二市（江戸・大阪）および二港（兵庫および新潟）の開市開港の向う十年間の延期およびロシアとの樺太国境の確定という使命を担わされていた。万延元年の遣米使節が、条約の批准書交換という、いわば儀礼的な任務を負って出発したとすれば、文久使節は、欧州列強を相手に、国の命運をかけて文字通り、日本の国益を代表して奮闘する立場におかれていた。福地と福沢は、ここで同役として登場するのである。福地は、つぎのように述懐している。

さるほどに幕府は竹内下野守、松平石見守、京極能登守の三人をば特命全権公使に任じ、欧州条約諸国すなわち英仏魯蘭李葡の六ヶ国へ赴き、帝王へ拜謁して聘問の礼を修め、兼ねては両者両港開市延期の談判を遂ぐべき旨を命じ、諸国帝王への御国書および全権委任状をも外国の例に倣ひて相渡されたり。<sup>(22)</sup>

興味深いのは、福地の正使および副使にたいする評価である。つぎのようにつづける。

当時の幕吏にてはこの三使はまずまずの人物にしてその撰を得たりと云ふべきも、もし井伊大老儲君論のこともなくて水野、岩瀬、永井、川路の諸傑がこの任に当りて欧州の形勢を親しく目撃したらんには、さらによろしかるべきにとの説は、その時に早く世上の云へるところなりき。<sup>(23)</sup>

---

注（22） 福地桜痴、『懐往事談』、76頁。

（23） 前掲、77頁。

ここには、青年時代に私淑した先輩、水野を晩年になって偲び、遣欧使節が幕政にどのような点で貢献しえたか、使節が卓越した才幹に恵まれたとはいえない人物によって構成されたため、十分な成果を収めることができなかつたことへの批判がみられる。さて、使節一行の陣容であるが、「三使に附属の人々」として、組頭柴田日向守（貞太郎）、御書幹掛水品薬太郎を筆頭に、通弁方として、福地源一郎、立広作、太田源三郎、翻訳方には、松木弘安（寺島宗則）、箕作秋坪、福沢諭吉が記されている。福沢は反訳方と称しているが、この翻訳方と福地の属している通弁方とでは、役職はまったく異なる。

福地と福沢は、この遣欧使節の行動を通じて、一年近くも接触していたのであるから、人間的な触れ合いや精神的な交流がみられそうなものであるが、『福翁自伝』も『懐往事談』も、この両者の関係についてはまったくふれるところがなく、福沢も福地と同じく、参加者のひとりとして、福地の名を掲げるにすぎない。相互に相手を意識しすぎて、無視し合ったのではないかと思われる。その点で、福地と福沢とのクールな関係を窺わせる『自伝』のなかのつぎの一節は興味深い。

……唯こゝに一つ可笑しいと云ふのは、日本は其時、丸で鎖国<sup>とかく</sup>の世の中で、外国に居ながら兎角外国人に遇ふことを止めやうとするのが可笑しい。使節は竹内、松平、京極の三使節、その中の京極は御目附と云ふ役目で、ソレには又相応の属官が幾人も附て居る。ソレが一切の同行人を目ツ張子<sup>めはりこ</sup>で見居るので、なかなか外国人と遇ふことが六<sup>むつ</sup>かしい。同行者は何れも幕府の役人連で、其中にまず同志同感、互に目的を共にすると云ふのは箕作秋坪<sup>しゅうへい</sup>と松平弘安と私と、此三人は年来の学友で互に往来して居たので、彼地に居ても此三人だけは自然別なものにならぬ。<sup>(24)</sup>

福沢にとって親しく交際し、西洋見聞について忌憚なく意見をのべ合うことが出来た仲間は箕作と松木で、福地は入っていない。福地は、通弁として、つねに三使節の側近にあって重要な役割を演じたことは疑いないが、同時にヨーロッパ文明についての体験的な叙述はいちじるしく少なく、『福翁自伝』に比べると、この点で物足りなさを感じさせる。

たとえば、福沢は、その『西航記』で書き記しているように、ヨーロッパ諸国への途上、香港で、中国人の英国人に酷使される状態に衝撃をうけ、「文明ヨーロッパと半開のアジア」を対比的に把握しているが、福地の『事談』には、一切このような認識は記録されていない。それでは源一郎は、同じくアジア人として、東洋諸民族の悲惨な隷従の状態に、何か感慨を催さなかったかといえば、そうではなく、福沢とちがって福地は、通弁として使節の側を離れるわけにはゆかず、福沢等のように「反訳方」として情報蒐集のための自由な行動を認められず、ためにその西欧認識が狭隘な枠のなかに閉じ込められたのではなかろうか。再び福沢のいうところを聞いてみよう。

何でも有らん限りの物を見やうと斗りして居ると、ソレが役人連の目に面白くないと見え、殊に三人とも陪臣で、然かも洋書を読むと云ふから中々油断をしない。何か見物に出掛けようとする、必ず御目附方の下役が附いて行かなければならぬと云ふ御定まりで始終附て廻る。

注(24) 『福翁自伝』、岩波文庫版、127頁。

此方は密売しやうではなし、国の秘密を洩らす気遣ひもないが、妙な役人が附て来れば只蒼蠅うるぎい。蒼蠅いのはマダ宜いが、其下役が何か外まじつかよに差支があると、私共も出ることが出来ない。ソレは甚だ不自由でした。私は其時に是れはマア何事はない、日本の鎖国を其まかっと担いで来て、  
欧羅巴各国を巡回するやうなものだと云て、三人で笑たことがあります。<sup>(25)</sup>

福沢等は、幕府権力者にとってはいわば危険人物であった。だが、それならば福地は信任されていたかといえ、必ずしもそうではなかったことが物語られている。これは、帰国後の文久三(1863)年のことと思われる。

かくのごとき状況なりしを以て、余がごとき少年饒舌じょうせつの者はおもつとも禍機に触れて、ためにおのれを災し累を幕府に來たすの懸念ありとて、すでに組頭の柴田貞太郎は森山を密かに招きて、源一郎は蹶跳多弁おとこの漢なり、この節がら彼もし営中において西洋諸国の事情を説き鎖攘の是非を論ずるやうのことありてはよろしからず、なるべきだけは出勤させぬやうにして自宅調べの用事を命じ置くべし、他人へもあまり面会せぬやうに申付くべし、奉行衆へもその趣を内々申上げて御承知なりと命じたれば、……余はこれによって格別の御用あるのほかは登城出勤をもなさず、小石川なる自宅に閉籠り、文久二年の十二月より三年の二月に至るまでの間に(26)おいて、歐洲巡回中に目撃しおよび聞き得たることどもを編輯して数巻の報告書を作りたり。

福沢等に劣らず、福地もまた極度の警戒心をもって幕府首脳部からみられていたことは明らかである。ただ注意すべきことは、ここでふれているように福地は幕命により、四百枚ばかり、五冊の報告書をとりまとめ、竹内下野守に提出していたことで、福沢の『西洋事情』をはじめ福田作太郎(27)の『英国探索』とならんで、西洋見聞の重要な史料となるべきものであった。しかし幸か不幸か、この福地の稿本は幕府閣老に竹内下野守の手を経て提出されたにもかかわらず、戊辰戦争の過程で紛失してしまった。「稿本も日記とともに戊辰の変に紛失したれば、今日となりては何等のことを書き記したるや我ながらも記憶せず。大分は福沢氏の西洋事情と同じほどの材料にて、殊には余が見聞の誤謬すこぶる多かりしことをその後再度欧行の節に知り得たるほどなれば、紛失して跡方なきがかへって仕合せなりと云ふべし」とのべているところをみれば、福沢の著書に匹敵しうる内容を秘めていたかもしれず、その紛失は惜しみて余りあることといわなければならない。福沢は、『西洋事情』において、三種の国家形態、君主制(=モナルキ)、共和政(=レポブリック)および専制国家(=デスポット)を見出し、英国の制度を、君主制と共和政治の混淆した独特の形態であることを認識し、将来の日本をその体制をモデルとして構想したが、福地は一体どのような国家観を抱いていたのであろうか。その意味で、つぎの一節は、彼のまことに卒直な告白として読むことができよう。彼が、国家というものを強烈に意識し、幕臣として徳川氏をたてて近代国家の礎石たらしめようとすると考えたのは、幕府倒壊の寸前のときであった。

注(25) 前掲、『自伝』、127頁。

(26) 福地桜痴、『懐往事談』、110～111頁。

(27) 沼田次郎・松沢弘陽『西洋見聞集』、岩波書店、日本思想大系66、に収められている。

国家と云へる観念も国体と云へる分別も実に余が胸中にはなかりしなり。その頃はすでにいささか洋書も読み、平生は万国公法がどうでござるの、外国交際がかようでござるの、国家は云々、独立は斯々などと読み囃り聴き囃りにて随分生利なる説を吐きて人を驚かし、以て自から喜びたりしも、今やおのれ自から身をその境界に置くに際してはまったく無学無識となりて、後患がいかであらうが、将来が何とならうがさらに貪着（＝頓着ではないか……引用者）するに違なく、ひたすら徳川氏をしてこの幕府を失はしむるが残念なりと云ふの一点に心を奪はれたり。<sup>(28)</sup>

「今日より回顧すれば、実に国家と云へる観念は我等が胸中には微塵もなく、さらに将来の利害禍福を察するに違なかりしは、悚然として我ながら身の毛も戦立つほどにてありき」とは、思うに桜痴の実感であったらう。幕臣福地源一郎は、幕府に殉じ、幕府の衰亡を期に世を捨てようとしたかにみえる告白の言ではある。しかし事實はそうではなく、明治を迎えて、ジャーナリズムの第一線に立ち、「福地・福沢」と並び称せられるようになるのである。ところで福沢は、この幕府終焉の時に臨んで、日本国家の将来を、どのように思索していたのであろうか。

福沢は慶応三（1867）年勘定奉行小野友五郎を主席とする軍艦「富士山」受領のための使節の一員として派遣され、二度目の渡米を果した。このときを追想して、つぎのようにのべているのは興味深い。

それは扱置き、私の一身に就て其時甚だ穩かならぬ事があった、というのは私は幕府の用をして居るけれども、如何なこと幕府を佐けなければならぬと云ふやうな事を考へたことがない。私の主義にすれば、第一、鎖国が嫌ひ、古風の門閥無理圧制が大嫌ひで、何でも此主義に背く者は皆、敵のやうに思ふから、此方が思ふ通りに、先方の鎖国家古風も亦、洋学者も外道のやうに悪むだらう。所で私が幕府の様子を見るに、全く古風の其まゝで、少しも開国主義とは思はれない、自由主義とは見えない……。<sup>(29)</sup>

それでは、幕府を倒して活動している、薩摩および長州を中心とする勤王派はどうか。

今の世間を見るに、之を毀さうと云て騒いで居るのは、所謂浮浪の徒、即ち長州とか薩州とか云ふ攘夷藩の浪人共であるが、若しも彼の浪人共が天下を自由にするやうになったら、ソレこそ徳川政府の攘夷に上塗りをする奴ぢやないか。ソレよりもマダ今の幕府の方がマシだ。けれどもドウしたって幕府は早晚倒さなければならぬ……。<sup>(30)</sup>

福沢は、やがて幕末、新しい日本の国家像を描くようになった。彼は、慶応二（1866）年十一月七日付の、福沢英之助（中津藩士、和田慎次郎を、幕臣として渡英させるため、自分の弟として改名させた）宛書簡の一節は、そのことを窺わせる。

……足下御帰りの比は日本も全く一面目改め、大小半袖杯見たくも有之間敷、小生も其内普

注（28） 福地、前掲書、185頁。

（29）『福翁自伝』、前掲、岩波文庫版、159頁。

（30） 前掲書、163頁。

請杯<sup>じん</sup>いたし候はゞ、疊なしの家を造り度存候。但しモニなし、御慰笑可被下候。○大名同盟の論は不相替行<sup>あいかわらず</sup>はれ候様子なり。此義は太郎殿敬輔殿えも内々御話し、兼て小生の持論にて御論破可被成<sup>なまるべく</sup>、同盟の説行れ候はゞ随分国はフリーにも可相成候得共、This freedom is, I know, the freedom to fight among Japanese, 如何様相考候共大君のモナルキに無之候ては、唯々大名同士のカジリヤイにて、我国の文明開化は進み不申、今日の世に出て大同同盟の説を唱候者は、一国の文明開化を妨げ候者にて、即ち世界中の罪人、万国公法の許さざる所なり。此議論は決して御忘却被成間敷候<sup>(31)</sup>……。

ここには重要なことが示唆されているように思う。すなわち、福沢は、幕府の衰勢は避け難いとしても、薩摩長州を中心とする尊王攘夷派には日本の国政は任せられないことを認識し、やはり徳川家を中心とする「大君のモナルキ」による幕政の再編成を構想していたことは明らかである。彼がその年の一月、倒幕のための薩長同盟の情報を得ていたかどうかは明らかではないが、ともあれ、尊王攘夷をスローガンとして掲げる薩長政権主導の政治は、「大名同士のカジリヤイ」と化すおそれがあり、信用できないことを吐露している点に注目しよう。

福沢の薩摩および長州にたいする猜疑は、明治政府の軌道に乗る頃まで消えず、やはり同じ年、慶応二（1866）年、第二次長州征伐論の昂まりに際し、「長州再征に関する建白書」を提出、そのなかで、「既に井伊榊原敗走の実験も有之、諸大名和流の兵幾万人有之候とも有名無実、逆も御用には不相成候事に御座候。……右の次第に付格別の御英断を以て外国の兵御頼相成、防長二州を一揉に御取潰し相成候様仕度……」<sup>(32)</sup>とのべているのは意味深長である。すなわち、「此御一挙にて全日本国封建の御制度を御一変被遊候程の御威光相頭候様無御座候ては不相叶義に奉存候」<sup>(33)</sup>。

福沢が、徳川政権があくまで中心となり、封建制度を一変することを期待するという、いわば、一種の日本的ポナパルティズムの出現を待望するという、きわめて複雑な心境にあったとき、福地はどのように、幕府の前途を見据えていたのであろうか。彼の云うところを聞いてみよう。時は慶応三（1867）年に入り、やや状況は緊迫の度を加え、將軍慶喜は、すでに大政奉還の意志を固めていた。

こゝにおいてか余は思へらく、將軍家すでに大政返上あらせたまひし上は、これを回復するは行ふべからざるの望みなり、この上は徳川氏はむしろ進んでその主任となりこれを実行せしむるにしかず、もしもこのまゝにて傍観せらるゝ時は、徳川幕府倒れて薩長幕府これに代るの状況たるにはかならざるべし、畢竟は朝廷を奉戴して国家統一の政令を施されんがためにこそ二百七十年以来の幕府政権を奉還せられたるなれ、いづくんぞ薩長および公卿の私有たらしめんとて奉還することやはある、よって將軍家は自ら禁裏に参内あって公卿諸侯諸藩会議の制度を立て、御自分その大統領となりて差図を下したまふべし。<sup>(34)</sup>

注 (31) 『福沢論吉全集』、第十七巻、30～31頁。

(32) 全集、第二〇巻、9～10頁。

(33) 上掲、10頁。

(34) 福地、『懷往事談』、159頁。

この提案が、いかに福沢諭吉の新国家建設の構想と共通するものであるか、一方は、「大君のモナルキ」といい、他方は徳川將軍を軸とする「大統制」を提唱する。そしてまさにボナパルティズムのそのものの出現に希望を見出している。つぎのようにつづける。

しかる時は、事すべてよく行はるれば、大政返上の目的を達すべく、事行はれざる時は、<sup>な</sup>那破<sup>ぼれおん</sup>崙が仏国におけるがごとく、名義は大統領にてその実は独裁の権を掌握したまふべきなり、<sup>(35)</sup>いたずらに大政を返上して公卿薩長のなすところに任ぜらるゝは御長計にあらずと。

勿論、小栗上野介の許に提出されたこの桜痴の建策は、採用されなかった。さきに、「国家と云える観念も国躰と云へる分別も、実に余が胸中にはなかりしなり」と絶望の情を告白したのは、このような時期であったと思われる。

幕府要路の人々の側近として、政治の中枢においてさまざまな情報に容易に接しうる立場にあった福地の提案がとりあげられなかった以上、幕臣とはいえ一陪臣にすぎなかった福沢の「長州再征に関する建白書」が問題にされなかったのは当然であった。福地は、この自伝の最後に、とくに「幕臣が身を処したる結局」という一節を設け、幕臣の末路を、つぎのように慨嘆している。

昨日までは殿様奥様と諸人に尊敬せられたる門閥の<sup>がんこしや</sup>紈袴者流が、世間に躰面あるを願ずしてあるひは料理屋となりあるひは汁粉天浮羅茶漬の店に居宅を變じ、妻子とともに客を迎へ、叩首して以て賤商の姿態に倣ふ、それも朝夕の活計に差支へるの故を以て一生懸命に従事せしならば、情においてなほ怨すべきところもあれども、その十中の三、四はいまだそれほどの困窮に陥らず相応の資財を所持しながら、面白半分に流行につれ、これを以て快事のごとく思ひ、<sup>(36)</sup>揚々得色あるに至りては実に憎みてもまたあまりありき。

幕臣福地源一郎は、明治三九（1906）年に死去した。三四（1901）年、六六歳で死去した福沢と比べると、まったく同時代人でありながら、福沢は明治三〇年、その自伝において幼少から晩年に至る、ほゞその全生涯を物語っているのに反し、明治二七年に著述された福地の自叙伝ともいべき『懐往事談』は、慶応三年、徳川慶喜の大政奉還と幕府の解体までで筆を擱き、つぎのように結んでいる。

この餘、余が幕府に在りける間に親しく接近したる幕末の三傑、水野筑後守、岩瀬肥後守、小栗上野介を初めとして、川路、堀、筒井、森山等の諸名士に関してなお追懐せることの多けれども、そは他日幕末史稿を編するの時に於て叙述することとして、余が往時を<sup>おも</sup>懐へる談は暫くこゝに筆を絶つ。<sup>(37)</sup>

福地は、この時期、徳富蘇峰の要請に応じて『国民之友』に『幕府衰亡論』を連載したが、<sup>(38)</sup>明治の新政を迎へ、はなばなしい言論活動の後半世を迎へたにもかかわらず、幕末から明治三九年至る多彩な後半生について、いわば『続懐往事談』を書くことはなかった。

注（35） 上掲、159～160頁。

（36） 上掲、160頁。

（37） 上掲、192頁。

（38） 福地源一郎『幕府衰亡論』、石塚裕道校注、平凡社、東洋文庫84。

文豪夏目漱石は、福地が亡くなった明治三九（1906）年一月四日の二日後、六日に、本郷区駒込千駄木町の自宅から、広島県山県郡加計村在住の加計正文宛の書簡のなかで、福地について、つぎのように書いている。

源一郎福地といふ男が死んだ。今の学士や何かは学問文章共に出来るが、女を口説く事と借金の手紙をかく事を知らないといふ演説をやった男ださうだ。死んでも惜しくない人です(39)ね。  
齒きぬに衣をきせず、いわば毒舌を吐く漱石ではあったが、桜痴の文才やかつての名声は気になるらしく、さらに一ヶ月後の二月六日付の野村伝四宛書簡のなかでは、つぎのように書いている。

夫それから福地桜癡（桜痴の誤まり……引用者）の幕末記事は今売ってるかね。いくらでどこに売ってるか教へてくれ給へ。桜癡といふ人の逸話を讀んだがあれは駄目な人間だ。然し当人は余程えらいと思ってる。生前は可成有名でも死ねばすぐ葬られる人だ。一寸学校の成績はよくても卒業して駄目になると同じ事だ(40)ね。

「福地・福沢」ともて囃され、「双福」と唱われた二人の巨人のうち、福沢の名は不朽で、その評価は益々高まりつつあるのに反し、福地源一郎を知る人は少ない。最後に、この点についてふれることにしよう。

## (五)

福沢が、明治十四年の政変について、『自伝』のなかでふれている一節に、つぎのような文章がある。

明治十四年の頃、日本の政治社会に大騒動が起て、私の身にも大笑ひな珍事が出来ました。明治十三年の冬、時の執政大隈伊藤井上の三人から私共に何か申して参って、或る処に面会してみると、何か公報のやうな官報のやうな新聞紙を起すから、私に担任して呉れろと云ふ。一向趣意が分からぬから、先づ御免と申して去ると、其後度々人の往復を重ねて話が濃くなり、とうとう仕舞に、政府はいよいよ国会を開く積つもりで其用意の爲めに新聞紙を起す事であると秘密を明かしたから、是れは近頃面白い話だ、ソナ事なら考え直して新聞紙も引受けやうと凡そ約束は出来たが、マダ何時からと云ふ期日は定まらずに、其まゝに年も明けて明治十四年と為り、十四年も春去秋来、頓とつと埒あやの明かぬ様子なれども、此方も左まで急ぐ事でないから打違うちがって置く中に、何か政府中に議論が生じた見え、以前至極同主義でありし隈伊井（大隈、伊藤および井上の略称……引用者）の三人が漸く不和になって、其果ては大隈が辞職することになりました。扱あて大隈の辞職は左まで驚くに足らず、大臣の進退は毎度珍らしくもない事であるが、此辞職の一条が福沢にまで影響して来たのが大笑ひだ。当時の政府の騒ぎは中々一通りでない。(41)

注（39）『夏目漱石全集』、第十四卷（書簡集）、岩波書店、昭和四一年、353頁。

（40）上掲、366頁。

（41）前掲、『福翁自伝』、383～284頁。

福沢は、伊藤、井上と大隈との間に横たわる政治上の問題をすでに洞察していた。明治十年、西南戦争に至って頂点に達した変革の嵐は、西郷隆盛の政治的失脚と鹿児島での憤死の後、大久保利通の暗殺を契機として、明治の政治に次第に不安定な要因を齎しはじめた。旧武士層の凋落や戦後のインフレーションに伴う正貨の流出などによる経済的困難が庶民の生活を脅やかし、自由民権運動が次第にたかまろうとしていたからである。この状況を見透し、福沢をもって自由民権運動の煽動者とみた政府は、「何か公報のやうな官報のやうな」政府のいわば御用新聞を福沢にひきうけさせ、これによって火元ともいべき福沢およびその門下生たちを自家薬籠中のものたらしめようとした。幸か不幸か、大隈と伊藤・井上等の政治的利害の対立と分裂により、この話は沙汰やみとなったが、実にこの政府の御用新聞の主筆たるべき役割を果すのは福地桜痴であった。

もし福沢が、この役をひきうけていたとすれば、彼がもっとも警戒していた政治の世界に、心ならずもひき込まれたであろうことは想像に難くない。そうなれば、あるいは、晩節を汚したという批判が彼に集中することが考えられるが、その点では幸に、彼は、勝海舟や榎本武揚を非難した「瘡せ我慢の説」(明治二四年十一月)をもって一貫することができたのである。

周知のように福沢は、薩長藩閥勢力を主軸とする明治政権にきわめて懐疑的で、明治維新を迎えて、

其時の私の心事は実に淋しい有様で、人に話したことはないが、今打明けて懺悔しませう。維新前後無茶苦茶の形勢を見て、<sup>とて</sup>逆も此有様では国の独立は六<sup>むつ</sup>かしい、他年一日外国人から如何なる侮辱を被<sup>こゝろ</sup>るかも知れぬ、左ればとて今日全国中の東西南北何れを見ても共に語る可き人はない。自分一人では勿論何事も出来ず亦その勇氣もない。実に情ない事であるが、いよいよ外人が手を出して跋扈乱暴と云ふときには、自分は何とかして其禍を避けるとするも、行く先の長い子供が可愛さうだ、<sup>(42)</sup>……。

無差別な排外政策を維新政府がとることを憂えた福沢の心理が浮かび出ている。案に相違して、文明開化を推進する政府に安堵した福沢ではあったが、新政府に仕官することを勧める神田孝平等の誘いはこれを拒絶し、政府とは一定の距離を保ち、生涯を通じて政治権力の座から身を隔てて行動した。

ところで「誰も彼も累々乎として喪家の狗のごとき様子に見え、<sup>あわれ</sup>憫むべき態のみ」と感じた福地は、「ただちに身を市井の間に投じて浅草に寓居し」、幕臣としての節操を完うするかにみえた。しかしその生活も、才子福地には続かなかった。

浅草馬道の長屋に居を定めた福地は、翻訳を業としていたが、やがて本郷に移り、湯島天神下に日新舎という洋学塾を開き、中江兆民が塾頭として招かれた。桜痴と兆民の組み合わせは非常に興味深い、ここでの問題ではない。兆民は仏学を桜痴は英学を担当したが、やがて桜痴の吉原通いが原因で廃塾となった。間もなく渋沢栄一の紹介で伊藤博文の知遇を得、早くも伊藤の推薦で大蔵省出仕となり、これが桜痴にとって運命的な出会いとなった。<sup>(43)</sup>彼のそれからの生涯にとって、伊藤

注(42) 上掲書、198頁。

(43) 小山人雄『明治の異才、福地桜痴——忘れられた大記者』、中公新書、昭和59年、68～69頁。

博文は、かつて水野筑後守、森山多吉郎、小栗上野介、柴田貞太郎等の如く、あるいは庇護者となり、あるいはひき立て役となった。しかしこのことは、彼が政治家伊藤博文によって操縦され、支配され、決定的に影響をうけることを意味した。幕臣として、要路の人々と接しその恩顧をえた福地が、かつて敵対的立場にあった伊藤博文等に近づくような行動をとったことは、福沢には到底理解しがたかったであろう。

明治三（1870）年、彼は貨幣制度調査のため、伊藤に随って渡米、帰国後間もなくの明治四年、岩倉遣欧使節団一行に随行、全権大使岩倉具視、副使木戸孝允、大久保利通等の知遇を得た。やがて明治六年の政変を契機に、福地は、翌明治七（1874）年、日報社の『東京日日新聞』に入社したが、ただこの新聞には、伊藤との関係で桜痴の功績ともいうべき「太政官記事印行御用」の特典を与えられた。政府批判に鋭い論鋒をむける自由民権の新聞に対抗して、民権派と対立する政府御用の新聞、半ば太政官御用の「官報」としての役割を担わせられた『東京日日』は、桜痴の名声もあって、その発行部数を急速に伸ばし、明治十年には、西南戦争に彼が従軍記者として活動したこともあり、九千部にも達したという。だが『東京日日』の盛大が、太政官御用の名の下に喧伝され、あたかも福地の意見が政府の見解を代表しているかのごとき観を呈したことは、彼にとってひとつの大きな不幸であった。すなわち、明治六年の政変で下野した参議のうち、西郷隆盛を除く四人が、「民撰議院設立建白書」を政府に提出して、自由民権運動の発端をなしたとき、『東京日日』を除く各新聞は、この運動を支持したが、この趨勢に脅威を感じた政府は、明治八年、「讒謗律令」と「新聞紙条令」を公布し、言論弾圧にのり出し、福沢論吉もまた危険を感じ、ついに『明六雑誌』の廃刊を敢てしたことはよく知られている。

こうした政府の民権派にたいする圧迫は、明治十四年の政変に至って頂点に達するが、福沢が辞職させられた大隈の側に立つとすれば敗者であり、これに反し、桜痴は伊藤との関係からすれば勝者ということになる。「大隈と同腹」という陰謀のような噂に憤りを覚えた福沢は、伊藤にたいし書簡を認め、政治の本義についての自己の信条を吐露している。明治十四年十月十四日付井上馨、伊藤博文兩名に宛てた、いわば公開質問状にも似た（但し、公表されなかったが）書簡の一節には、

尚これよりも迷惑なることあり、近日世間の噂に福沢は大隈と連絡を通じて民間を教唆し、政府の主義に<sup>もと</sup>戻て妄に国会開設論を唱る者なりと云ひ、尚無稽の極に至ては福沢は土佐の立志社などと応援して遂には顛覆論に陥るも計る可らずと云ふ者あり。此流言、所謂愚俗民間の流言なれば犬の吠るに異ならず、頓着なしと雖ども、中々以て官海に流行する由にて、昨今は八方より拙宅へ書<sup>(44)</sup>を投ずる者あり。

この一節は、福沢の門下生で外務省出仕の津田純一が、上野外務大輔に呼ばれ、福沢の一味であるという理由で辞表提出を強要されたことに憤りを発し、抗議したものであるが、これにたいし、井上は、簡単に返答したが、伊藤は完全にこれを黙殺した。かくして福沢と伊藤との関係は、決定的に悪化し決裂したことはいうまでもない。いまや伊藤の庇護をえて東京日日新聞に拠り、政府御

注（44）『福沢論吉全集』、第十七巻、477頁。

用を勤める桜痴は、福沢にとって吐棄すべき存在となった。

明治十四年の政変以後、福地の東京日日は、郵便報知、朝野新聞および曙新聞を抑えて、いまや新聞界の雄となった。しかしその隆盛も長くはつづかなかつた。明治十五年、福沢がその門下生を率いて『時事新報』を発刊したとき、その前途にひとつのかげりを見出したが、より決定的であったのは、山県有朋の政府による官報発行を主張する上申書が採択されたことであつた。明治十六年、「官報」第一号が発行され、彼が伊藤博文を支持し、東京日日新聞をもってその機関紙とした立憲帝政党は、その年九月には解散を宣言しなければならない状勢となった。

しかしながら、官報発行に伴い、東京日日が退潮期に入ったとはいえ、福地は四三歳、まさに壮年、男盛りの年齢を迎えていた。彼の社会的活動が凋落の時期に入ったとはいえ、東京日日は健在で、彼自身も明治十八年には伊藤博文に随行して清国に渡るなど活発に行動していた。だが明治十五年を過ぎる頃、彼の社会的行動にはある種の質的变化ともいふべきものが現われはじめていた。福沢諭吉と比較しつつ、彼の晩年の業績を追ってみよう。

明治十年、西南戦争に現地特派員として戦況報告を送っていた丁度そのとき、福沢は、「丁丑公論」を執筆、門下生と協力して西郷隆盛を、賊軍としての汚名から免れさせようと努力した。またその翌年、福地は東京府会議長に選ばれ、福沢は副議長に選出されたが、福沢は多忙を理由に辞し、翌十二年には東京学士会院会長に選ばれている。『民情一新』が刊行され、翌十三年、念願の交詢社が設立された。この時期までは、まさに「福地・福沢」と並び称せられるにふさわしい時代であつたが、明治十四年の政変を転機として、この両者は対照的な行動の軌跡を描いていく。

東京日日新聞の不振が原因で、日報社の経営が危機におちいった明治二一年頃から、彼の活動は、政治やジャーナリズムの世界を去って、小説や戯曲の執筆、また歌舞伎座創設への参画をみるように、文芸とりわけ人情物を中心とする舞台の脚本の世界に沈潜していった。勿論、『幕府衰亡論』（明治二五年）および『懐往事談』（二七年）などの傑作も生み出されたが、時局にたいして志を述べる往年の情熱は、次第に失われようとしていた。これに比べるならば、ライヴァル福沢諭吉は、日本の独立と文明のための著作活動にその全エネルギーを集中させていたといふことができるであろう。

明治十五年、『時事新報』の創設につづいて、『帝室論』、十六年、『学問之独立』、十七年、『通俗外交論』、十八年、『品行論』、明治二一年には、『日本男子論』および『尊王論』と、実に多彩な著作活動を行い、また二四年には勝海舟および榎本武揚を批判した『瘠我慢の説』を執筆している。福沢は明治三四（1901）年二月三日に死去し、福地は五年おそく明治三九（1906）年一月四日にこの世を去っている。ともに六六歳であつた。

× × × × × ×

夏目漱石は、何故にかくも苛酷な表現で福地を評価したのであろうか。思うに若くしてヨーロッパに遊び、西洋文明の真髓にふれながら、これを理解し体得しえなかつた幕末知識人の悲劇として把えることができるのではなからうか。福地の庇護者であり、上司でもあつた多くの幕末知識人、水野忠徳、森山多吉郎、柴田貞太郎、小栗忠順などは、そうした知識人で、岩瀬忠震はむしろ例

外であったといえよう。文明の根底をなす合理的な思考、これを理解しえなかったのである。福沢諭吉は、『文明論之概略』においてこのことを力説してやまなかった。そして福地が、生涯を通じて、いつの時代でも、権力を掌握する勢力あるいは人物に身を寄せ、その運命を委ねたのに反し、政治権力の醜悪さも見事さもともに洞察し、これをもっとも恐れたのは福沢ではなかったか。ひたすら権力者に身をよせ、政治的な流れに従って一身を処する者と、他方、政治権力の外に身をおき、一定の距離を保ちながら、一世に卓絶して、文明の何たるかを民衆に訴えつづけた人物、いずれにしても福地桜痴と福沢諭吉は、幕末から明治にかけて、もっとも早い時期にヨーロッパ文明の洗礼を受け、しかももっとも対照的な生き方をした巨人として、尽きることのない学問的興味の対象でありつづけるであろう。

<追記> この稿を草するにあたり、小山文雄氏の力作、『明治の異才福池桜痴——忘れられた大記者』中央公論社、から有益な示唆をうることが出来た。学恩に深謝するものである。また明治期に入っの両者の関係については、スペースの関係から割愛した部分が少なくないことをおことわりするものである。(1989・11・18)

(経済学部教授)